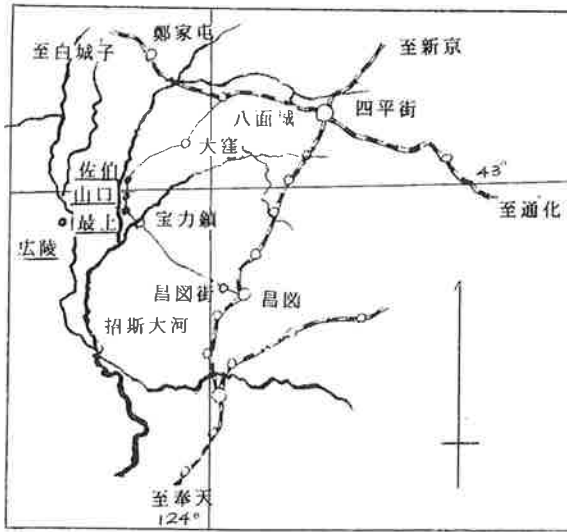


満州佐伯村おぼえ書 (続)

第十次昌図佐伯開拓団小史 (二)

矢野 徳 弥

(会員・南海郡本匠村)



一嵐の前

(本隊、農場隊員の入団)

昭和二十年に入り、本土決戦が不可避とされる情勢の中で、なお三九の開拓団の送出が強行されたが、新設・後続を合わせ一、〇五六名の団員が渡満したところで、それ以降の移民はついに打ち切りとなった。もはや本土大陸間の輸送事情がこれを許さなかったのである。

アメリカ軍が沖縄に上陸したその翌日(四月二日)佐伯開拓団にも最後の本隊が到着したが、その数は僅かに七名であった。しかし、現地側にこの時期「移民送出に對する母村側の力不足を非難する声」はまったく聞かれなかった。

そして、この本隊に同行して、新たに古田 勝(四三上野村)・平川 清(三三三・佐伯市)の両訓導が着任し児童数が一〇〇名を越えた佐伯国民学校の教育体制が充実されたことに、大きな喜びを隠さなかった。

本隊に次いで、大分県報国農場の隊員九〇名も、三回に分かれ到着したが、その半数以上は女子で、男子の多くも兵役に関係のない低年齢者によって占められていた(最盛を誇る)

それでも、家族を伴った本隊・教師・指導員などの入団により、四月三十日現在における佐伯開拓団の在籍者は、

男子 三五四名 女子 三〇二名 合計六五六名

となり、応召者を除き約六三〇名、農場隊員を加えると、七二〇名を越える人員が居住することになり、多数の若い男女を交え、一空襲に怯える日本内地とは比べようもなく「明るく、活気に満ちた新天地の生活が営まれていた。五月十四日、例年になく賑やかな「梨花見」が本部で催され、その翌日から一斉に水田の耕起作業が始まった。一年の内で最も忙しい季節である。朝早くから夜遅くまで、大勢の男女が水田に出て働いた。これがまさしく佐伯開拓団の最盛の時であった。

(根こそぎ動員)

そこに突如として大量の召集令状が届き、前年着任したばかりの若い教師児玉紳雄、長く本部にあって事務を総括してきた柳井 光など二三名が、五月二十三日、満州東部の部隊に入隊。次いで守永・金田・田川(農場)の三指導員を含む三一名が召集され、六月二十三日、今

度は新京・奉天などの部隊に送られた。

この結果、多勢を誇ったも東の間で、団員農家の中核となるべき壮年男子のほとんどが姿を消し、団の運営、農作業の困難はおろか、にわかに治安の維持さえ憂慮される事態へと急変したのである。

(農場隊員の動揺)

昭和二十年の農場隊員(勤労奉仕隊)の派遣に当たっては戦局の前途を懸念する中央省庁の間で、その是非をめぐり激しい意見の対立があったが、最後には食糧確保に責任を持つ農商省がこれを押し切り、各府県に命じて隊員の派遣を強行した。

しかし、それから僅か三カ月の間に戦局は極度に悪化し、沖繩戦が終息に向かう頃から朝鮮海峡の往来は困難となり隊員の年内帰国は絶望視される情勢となった。

七月十八日、新京で全満の農場長会議が開かれ、緊急措置として「農場隊員は身分を徴用の扱いとして残留させることとし、原則としてその帰国を認めない。ただし病弱の者、農家の後継ぎなど特別の事情のあるものは、この際帰国させる」という方針が示された。

「戦争の終わるまで、内地には帰さない」という決定は、若い隊員たちにとって衝撃的なニュースとなったが「一部の者の帰国を認める」不公平さがまた大問題であった。農場では人選に苦慮し、対象を女子だけに絞り、家庭の事情、健康などの条件を検討して割り当てられた一二名の帰国者を決め、七月の終りに、駅前の弁事処に移してここで待機させた。ところが、帰国の人選に洩れた県南出身の女子隊員の一人が、前途を悲観して自殺するという不幸な事件まで発生し、隊員たちをこの上なく不安・動揺に陥れたのである。

（最後の追い込み動員）

隊員の長期残留が決められたとき、動揺する隊員を前に農場長（佐伯開拓団長兼任）は、「やがて戦場となる本土への帰国を急ぐより、日本陸軍の中で、最強といわれる関東軍によって守られるこの満州で、戦況の好転をしばらく待つがよい」と慰めた。

その最強であるべき関東軍から、「八月五日入隊」を命ずる緊急の令状が届き、十七歳以上の農場隊員七名と

身障者を含む団の五名が応召を余儀なくされた。この結果、団の地域から壮年男子の姿はほとんど消え、老人婦女子のみが多く取り残される状態となった。

（ソ連軍の侵攻）

八月九日午前零時、極東のソ連軍は一斉に行動を起こし、東部・北部・西部の国境を越え、怒涛のごとく侵入を開始した。これに対し関東軍は根こそぎ動員による急造の部隊を前線に残し、主力は朝鮮に接する大連・新京・図們を結ぶ三角形の中に撤退し、国境での真剣な抵抗を放棄する作戦をとった。

このため国境の防衛線は難なく破られ、後方にあった開拓民の村はたちまちソ連軍の蹂躪を受け、あるいは銃撃・暴行・自決・飢餓などにより、世界の移民史上類例のない八万人という多数の犠牲者を出すこととなったところが、佐伯を始め昌図県下の開拓団は、遼河の流れに助けられてソ連軍の侵攻経路から外れ、危うく壊滅の難を免れることができた。ハロン・アルシャン方面から白城子を通り、鄭家屯に入ったマリノフスキーの軍団は、昌図の遙か西方を南下して新民に至り、そこから奉

天に向かったのである。

九日朝、隊員の帰国問題で農場長に代わり新京に出張した梅原治夫（県職員として隊員を引率して入団。その後帰国不能となり弁事処に滞在、今回の措置による一部帰国者に同行帰国の予定であった）は、途中列車がソ連機の爆撃を受け、一時行方不明となったが、十二日になって弁事処まで帰着。待機の女子隊員を引き連れて農場に復帰した。

梅原の報告を受け、団長は事態の容易ならざることを知った。土地の農民たちはしきりに大鼻子（ターピーズ）への恐怖を語り始めていた。四〇年前（露日戦役）この地方一帯が、鼻の大きな軍人たちに占領され、略奪・暴行・殺戮を欲しいままにされたひどい体験を思い出したのである。

治安情勢の悪化を懸念した団長は、農場に指示して男子隊員二名ずつを各部落に派遣し、昼夜の警戒を厳重にして中央からの正式情報を待った。

このとき、北に隣接する双遼県では驚くべき事件が進行していた。

ソ連軍の侵攻を知った副県長（日本人）は、すぐさま

配下の開拓団に対し、「重大事態だ。ただちに現地を離脱せよ」と厳命し、同時に救援の馬車一六〇台を現地に派遣した。連絡を受けた神門郷（宮崎県）、祖谷郷（徳島県）、宇和島郷（愛媛県）の三開拓団は、指示通り六〇キロメートルの道を辿り、十四日鄭家屯に出てきた。副県長はここで五〇万円の金を渡し、すぐさま通化に向かう貨物列車に乗せた。一行六一六名はその先朝鮮を経由し、九月三日、無事故国の土を踏んだのである。

その頃、昌図県下には次の開拓団等が入っていたが、監督官署に、それほどの切迫した対応はみられなかった

佐伯村開拓団（大分・昭和一六）	五八三名
山口村開拓団（山口・昭和一六）	三七〇名
最上郷開拓団（山形・昭和一六）	二二八名
広陵郷開拓団（広島・昭和一八）	三七五名
落葉松開拓団（東京・昭和一九）	四八名
山形村開拓団（山形・昭和二〇）	二二二名
高南郷開拓団（高知・昭和二〇）	一一八名
大分県報国農場（昭和二〇）	七七名
山形県報国農場（昭和二〇）	一〇名

（応召者を除いた敗戦時の実在人員）

二 敗戦（昭和二十年八月）

（敗戦を知る）

国境から遠く、侵攻経路からも外れてソ連軍の直撃を免れたこの地区に、太平洋戦争の敗戦が伝えられたのは天皇の放送から二日遅れたあとのことだった。

八月十七日、その日はよく晴れていた。佐伯開拓団では念願の共同墓地（納骨堂）が完成したため、本部西脇の現地に団員やその家族を多数集め、記念の法要を営んでいた。

そこに突然本部からの連絡が届き、団長の口から初めて敗戦の事実が告げられたのである。団長は、日本が連合国に対し無条件降伏したこと、これに関し、十五日天皇の放送があったことなどを知らせ、不安におののく団員たちに、

「これにより、ただちに土地の住民と、敵対関係に入るわけではない。しかし、戦いに負けた以上、これから先どのような苦難に遭うかは予測できない。警戒を厳重にし、最後まで希望を失うことなく、互いに助け合って、情勢の推移に対処していこう」

と訓示して、全員を励ました。

納骨堂は、団員たちが此処を永住の地と定め、骨を埋めることを決めた象徴的な建物であった。その落成の日、開拓村の終りを暗示する重大な出来事が告げられるとは、なんとという皮肉であつたらう。

団長は、宝力鎮警察署から既に情報を得ていたが、昌岡在郷軍人会から改めて、

「敗戦、降伏の事実と、治安の維持について万全を期すよう」

正式の通告を受け、これを明らかにしたのである。

無条件降伏だ！との報を、鉄道沿線五三キロの僻地開拓団で受けたのは、八月十七日の早朝であつた。為にせんがためのデマであろうと信ずることができず、発表を押さえたが、爾後の情報により不幸にも事実であることが確認され、以来、不安と恐怖におののく日は続く。

団員たちの受けた衝撃は大きかった。だが、それでもまだほとんどの人達が、〃やがて敗戦の混乱が治まればなんらかの形で開拓村は存続する〃との希望を捨てていなかったし、中には、

「土地の住民には、しばらく敗戦のことは黙っておこう」という甘い考えの団員もいた。

（土匪の来襲）

しかし、国が敗れ、いったんその保護が失われたとき他国の領土で生きるものに、どのような運命が待ち受けているか……それを知るのに時間は要らなかった。

その夜、団の北西にある八方（やかた）部落が、突如一四名もの土匪に襲われ、家具・金品のことごとくが強奪された。ここには北山武雄とその兄弟・工藤弥助、岡田誉喜などの団員が居住していたが、男子の多くは出征し、老人婦女子が残されてこの難にあったのである。

入植以来、小さな盗難事件はあつても、家が襲われるという例は絶えてなく、それだけに、この事件が団内に与えた恐怖は大きかった。

八月十七日、予期したごとく、暴民十四名、八方部落を襲い、家具・家財を強奪。

この事件をきっかけとして、各部落に盗難事件頻発し、人心極度に動揺す。

その翌日、今度は豊栄（とよさか）の旧本部跡に居住す

る藤野昇の家が襲われ、馬と家財を奪われる事件が発生した。賊は八方の事件と同じく、対岸の七家村（チージャースン）方面から来ていた。

（自衛の強化）

事態を重く見た団長は、稗田甚三を指導員に準ずる警備責任者に任命し、その指導の下に、団内の一五歳から二〇歳までの男子全員を集め青年防衛隊を設置し、これまで一度も使用したことのない銃一五丁を渡し、団内の警戒巡視に当たらせることとした。稗田は負傷により退役した者で、六年という長い戦歴をもち警備責任者として、この際格好の人材であった。

銃を手にした青年隊が行動し始めると、地域内は再び平静を回復した。

（日本軍の駐留）

そして十九日には待望の日本軍が、救援の手を差し延べてくれた。昌図郊外に駐屯していた対戦車砲の本田部隊が、開拓地の不穏な情勢を知り、警備の兵を派遣してきたのである。兵の数は少なかったが、戦車を思わせる

牽引車の轟音が周辺一帯を制圧し、極めて強力な日本軍が開拓地に入ったと教えるに十分であった。整然と統制を保つ日本軍がまだいたのである。

八月十九日

昌図駐屯中の日軍一〇一三部隊の一分隊十六名、居留民保護のため、牽引車を駆って入団駐屯せるにより、団地域内の治安回復したるも、対岸地区に共産匪襲来の報頻りなり。

(団員の復員)

一方、崩壊した日本軍を捨て、早くも帰国するものが増え始めた。最初に帰ったのは、八月始めに招集され通化のある部隊に入隊した「某」である。その語るところによると……

「十五日の朝命令受領に行くと、将校たちが盛んに議論していた。どうも戦争に負けたということらしかった。

正午に全員集合があり、天皇陛下の放送を聞いた。連隊長は徹底抗戦の方針であったが、将校たちの考えは違っていた。そのうち何名かの将校が連隊長を連れ去り（一説には殺したとも……）強引に部隊の解散を決めてし

まった。それから一目散に駅まで走り、北上する回送列車を利用して逃げ帰った。十七日の夜苦勞して団に帰り着き、団長に報告に行ったところ、

『逃亡兵ではないか』と、激しく叱責された。団長には日本軍の崩壊がどうしても信じられぬ様子であった』

という。

二十日を過ぎた頃から月末にかけて、通化・新京・奉天など南滿州各地に応召した団員たちの多くが帰り、守永・金田の西指導員も本部に復帰して、団の指導体制も再び強化された。

八月二十日

先に通化に応召したる者、招集解除、または逃亡により漸次帰国する者多く、警備力やや強化さる。こうして、八月の月はおおむね平穩に経過したのであった。

(棒線部分は元開拓団長矢野武吉の手記『佐伯村遭難記』による。)